

いさましい ちびの仕立屋さん

グリム Grimm

矢崎源九郎訳

青空文庫

ある夏の朝のことです。ちびの仕立屋したてやさんが窓まどぎわの仕立台したてだいにむかって、いいごきげんで、いっしょうけんめい、ぬいものをしていました。

すると、ひとりのお百ひやくしやう姓せいさんのおかみさんが通りをやってきて、

「じょうとうのジャムはどうかね、じょうとうのジャムはどうかね。」
と、よばまりました。

この声が、ちびの仕立屋したてやさんの耳みみに、いかにも気持ちよくひびいたのです。それで、仕立屋さんは小さな頭まじを窓まどからつきだして、よびとめました。

「ここへあがつてきてくれよ、おかみさん、その荷にがからになるぜ。」

おかみさんはおもいかごをかかえて、階かいだん段だんを三つあがつて、仕立屋さんのところへきました。そして、いわれるままに、ジャムのつぼをのこらずあけてみせました。仕立屋さんはそのつぼをみんなしらべて、いちいちもちあげては、鼻はなをくつつけてみました。そのあげくのはてに、こういいました。

「よさそうなジャムだね、おかみさん。四口しこうトと（一ポンドの約三十分の一）ばかりはか
つておくれ。なに、四分の一ポンドぐらいあつたつかまやしないよ。」

たくさん買ってもらえるとばかり思っていたおかみさんは、仕立屋さんのくれというだけをはかってわたししましたが、ぷんぷんおこって、ぶつぶついいながらいつてしまいました。

「このジャムは、神さまがおれにめぐんでくださったんだ。」

と、仕立屋さんは大きな声でいいました。

「これで強い力をさずけてくださるんだ。」

仕立屋さんは戸だなからパンをだしてきて、大きなパンのかたまりからひときれ切りとって、その上にジャムをぬりつけました。

「こいつはにがくはないだろう。だが、食べるまえに、このジャケットをしあげちまおう。」と、仕立屋さんはいいました。

そこで、仕立屋さんはパンをじぶんのわきにおいて、またぬいはじめました。けれども、うれしいものですから、つい、ぬいかたがだんだんあらくなってきました。

そのうちに、ジャムのあまいにおいが、ハエのたくさんとまっている壁をつたっていききました。ハエはにおいにさそわれて、パンの上にはいっばいあつまってきました。

「やい、やい、だれがきさまたちに来てくれていった。」

仕立屋さんはこういって、よびもしないのにやってきたお客さんたちを追っばらいました。けれども、ハエたちには、ドイツ語ごなんかわかりません。ですから、追いはられるどころか、だんだんになかまの数をふやしては、なんどもなんどもどつてくるのです。こうしているうちに、とうとう、仕立屋さんのかんしやくだまが爆発ばくはつしました。仕立屋さんは仕立台したてたいの穴あなから布ぬのきれをつかみだして、

「待つまてろ、こいつをくれてやる。」

と、さけぶがはいか、そのきれで思いきってハエをたたきました。

仕立屋さんがきれをとつてかぞえてみますと、ちょうど七ひきのハエが目のまえに死しんで、手足をのばしています。

「なんて弱よわ虫むしなんだ。」

と、仕立屋さんはいって、じぶんのいさましいのに、われながら感心してしまいました。

「こいつは、町じゆうに知らせてやろう。」

そこで、仕立屋さんはおおいそぎで、帯おびを一本裁たって、ぬいあげました。そしてそれに、大きな字で、「ひと打ちうちで七つ」と、ししゆうをしました。

ところが、仕立屋さんは、

「ふん、町なんかなんだい。世界じゆうに知らせてやるんだ。」
と、いいました。

仕立屋さんの心臓は、うれしすぎて、まるで小ヒツジのしっぽみたい、ぴくぴくうごいていました。

仕立屋さんはその帯をこしにまきつけました。これから、世のなかへでていこうというのです。だって、こんなしごと場なんか、じぶんのいさましさにくらべれば、あんまり小さすぎますもの。

でかけるまえに、仕立屋さんは、なにかもっていけるものはないだろうか、うちのなかをさがしてみました。けれども、古いチーズがひとかけらしか見つかりませんでした。それで、そのチーズを、仕立屋さんはポケットにつっこみました。

町はずれの門のところ、一羽の鳥がやぶのなかにはいって、でられなくなっているのを見つけました。これもチーズといっしょに、ポケットにつっこみました。

それから、仕立屋さんは、いさましく、大またに歩いていきました。身がかるくて、すばしこいので、ちつともつかれませんでした。

そのうちに、道は山へさしかかりました。てっぺんについてみますと、そこには雲つく

ような大男がすわっていて、いかにものんびりとあたりをながめていました。仕立屋さんは勇気をだして、その大男のほうへ歩いて行って、よびかけました。

「やあ、どうだね、きようだい。おまえさんはそこにすわりこんで、ひろい世間をながめているってわけかい。おれもちょうどそのひろい世のなかへでていこうってとこさ。運だめしでもしようと思つてね。おまえさん、いっしょにいく気はないかい。」

大男は、ばかにしたように、仕立屋さんをじろつとながめて、

「きさま、どこの馬のほねだ。みつともない野郎だな。」
と、いいました。

「なんだと。」

仕立屋さんはこういつて、上着のボタンをはずして、大男にあの帯を見せました。

「こいつを読めば、おれがどんな男か、わからあ。」

大男は「ひと打ちで七つ」と書いてあるのを読んで、仕立屋さんがうち殺したのは、てつきり人間だと思いました。それで、このちびすけをちつとはうやまう気持ちになりましたが、でもまあ、とにかくためしてやれ、と腹のなかで思いました。そこで、大男は石をひとつ手にとつて、ぎゆうつとにぎりしめました。すると、その石からしずくがぽたぽた

とおちました。

「きさまに力があるんなら、このまねをしてみろ。」

と、大男がいました。

「なんだ、たつたそれつきりかい。おれにとつちや、そんなこたあ、お茶の子だ。」

仕立屋さんはこういって、ポケットに手をつつこんで、あのやわらかいチーズをとりだしました。そして、それをぐいとにぎりしめましたので、しるがだらだらとながれだしました。

「どうだい、ちと、おれのほうがうわてだろう。」

と、仕立屋さんはいました。

大男は、なんとこたえていいのか、わかりません。このちびすけに、こんなことができようとは、どうしても信じることができません。そこで、こんどは、石をひとつひろって、目ではほとんど見えないくらい高いところまでほうりあげました。

「さあ、ひよつこ野郎、おれのまねをしてみな。」

「うまくほうつたな。」

と、仕立屋さんがいました。

「だが、あの石は地面じめんへおっこつてきたじやあないか。おれがいまほうつてみせるのはな、二度ともどつてこやしないんだぞ。」

仕立屋さんはポケットに手をつっこんで、あの鳥をつかむと、いきなりそいつを空へほうりあげました。

鳥は自由じゆうになったのをよろこんで、空へのぼつていきました。そして、どこともなくとびさつて、二度ともどつてはきませんでした。

「おい、きょうだい、こんなことでいいのかい。」
と、仕立屋したてやさんがたずねました。

「ちよいとばかりしなげるなあ、きさまも。」
と、大男がいました。

「だが、こんどは、きさまにまともなものがかつげるかどうか、ためしてみようじやないか。」

大男は仕立屋さんを、大きなカシの木が地じべたにたおれているところへつれていきました。そして、

「きさまにほんとうに力があるんなら、おれに手をかして、この木を森のそとまではこび

だしてくれ。」

と、さそいかけました。

「いいとも。」

と、ちびさんはこたえました。

「それじゃあ、おまえは幹みきのところをかつぎな。おれは大枝おおえだを小枝こえだごとかつぐからな。なんてったって、こいつがいちばんほねのおれるしごとさ。」

こういわれて、大男は幹をかつぎあげました。ところが仕立屋さんしたてやは、すましたもので、大枝の上にこしかけました。大男はうしろをふりむくことができせんから、大きな木をまるごと、おまけに仕立屋さんまでもいっしょにかついでいかなければなりません。うしろにのった仕立さんは、まことにごきげんで、陽気ようきなものでした。木をかつぐのなんか、まるで子どものあそびだともいうように、

お馬うまにのった仕立屋さんしたてや

三人そろって町からでいった

と、小唄こうたを口笛くちぶえでふいていました。

大男はかなりのあいだおもしろ荷物にもつをひきずっていきましたが、もうどうにもそれいじよ

うすすめなくなりましたので、

「おい、木をおとすぞ。」

と、どなりました。

仕立屋したてやさんはひらりととびおりて、両腕りょううでで木をかかえました。こうして、いままで

ずつとかかえていたような顔をして、大男にむかつて、

「おまえさんは大きなずうたいをしているくせに、こんな木ひとつ、かつげないのかい。」
と、いいました。

ふたりは、それからまた、いつしよに歩いていきました。やがて、一本のサクラの木
そばをとおりかかりました。すると、大男はじゆくしきったサクラランボのなっている木
てつぺんを、ひよいとつかんで、ひきおろしました。そしてそれを仕立屋したてやさんの手にもた
せて、サクラランボを食べるようにいいました。でも、ちびの仕立屋さんでは、とてもその
木をおさえているだけの力がありません。ですから、大男が手をはなしますと、とたんに
木ははねかえつて、それといつしよに、仕立屋さんも空へはねとばされてしまいました。

それでも、仕立屋さんがけがひとつしないので、おちてきますと、大男はいいました。

「なんだ、きさまには、こんなほそい枝えだをおさえているだけの力もないのか。」

「力がないんじゃない。」
と、仕立屋さんがいいました。

「おまえさん、ひと打ちで七つもやつつけた男に、こんなことがもの数にはいるとも思ってるのかい。おれはな、下で猟師がやぶんなかへ鉄砲をうってるから、ちよいと木をとびこえただけなのさ。おまえさん、できるなら、おれのまねをしてとんでみな。」
大男はやつてみましたが、木をとびこすことができないで、枝のあいだにひっかかってしまいました。こんなわけで、こんどもまた仕立屋さんの勝ちになりました。

大男はいいました。

「おまえがそれほどいさましい男だというんなら、いっしょにおれたちの岩屋へきて、とまってみろ。」

仕立屋さんは、待つてましたとばかりに、大男のあとについていきました。

岩屋についてみますと、そこには、ほかの大男たちが火のそばにすわりこんで、めいめい丸焼きにしたヒツジを一ぴきずつ手にもって、むしゃむしゃ食べていました。

仕立屋さんはあたりを見まわして、

(こりゃ、おれのしごと場よりずっとひろいや。)

と、思いました。

さっきの大男は、仕立屋さんに寝床ねとこをひとつきめてやって、

「それにもぐりこんで、ゆつくりねろ。」
と、いいました。

でも、ちびの仕立屋したてやさんには、その寝床ねとこは大きすぎました。ですから、仕立屋さんはなかへはもぐりこまずに、ほんのすみっこにはいこんでいました。

ま夜中よなかごろ、大男は、仕立屋さんがもうぐつすりねこんでいるものと思いました。そこで、大男はそつとおきあがって、大きな鉄てつの棒ぼうをひつつかみ、それで仕立屋さんのねている寝床をひとつ、ガンとなぐりつけました。そして、これで、あのバツタみたいなちびすけの息いきの根ねをとめたつもりでいました。

朝はやく、大男たちは森へでかけましたが、仕立屋したてやさんのことなんか、もうすっかりわすれていました。ところがそこへ、ひよつこり、仕立屋さんがいかにもゆかいそうに、へいきな顔をしてやってきましたので、大男たちはびっくりぎょうてんしました。そして、仕立屋さんがじぶんたちみんなをなぐり殺ころすのではないかと思うと、こわくなって、おあわてでにげていきました。

仕立屋さんは、じぶんのとんがった鼻はなのむくほうへ、ずんずん歩いていきました。長いあいだ歩いたのち、とある王さまのお城しろの庭にわにはいりこみました。仕立屋さんは、ひどくくたびれていましたので、草のなかにねころんで、そのままねむりこんでしまいました。

こうしてねているあいだに、お城の人たちがやってきて、四方しほう八方はつぱうから仕立屋さんをながめまわしました。そして、帯おびに「ひと打ちうちで七つ」と書いてあるのを読みました。

「はてと、こんな平和へいわなときに、この大だい力りきの豪傑ごうけつはここでなにをしようというのだろうか。」

と、みんなは口ぐちにいいました。

「これはきつと、えらいさむらいにちがいない。」

みんなは王さまのところへいつて、このことを話しました。そして、

「もし戦争せんそうでもはじまりますと、これは、きつとたいせつな、役やくにたつ人になると思います。ですから、どんなことをしても、よそへおやりにならぬほうがよろしゅうございます。」

と、意見いけんをもうしあげました。

王さまも、この忠告ちゆうこくをきいて、もつともなことだと思いましたので、仕立屋したてやさんの

ところへおつきのものをひとりやりました。その男は、仕立屋さんが目をさましたら、さむらいになって、王さまにつかえるようにすすめる、といいつかつたのです。

使つかいのものは、ねむっている仕立屋さんのそばに立って、待まっていました。やがて、ようやくのことで、仕立屋さんが、うんとひとつのびをして、目をあげました。そこで、使つかいのものは、王さまからいつかつてきたことをもうしでました。

「いや、そのためにこそ、わたしはこの国へまいつたのです。いつでもよろこんで、王さまにおつかえいたします。」

と、仕立屋さんはこたえました。

こうして、仕立屋さんはうやうやしくむかえられました。そして、とくべつの住まいをひとついただきました。

ところが、ほかのさむらいたちにとつては、仕立屋さんがじやまでなりません。みんなは、こんなちびすけはどこか千マイルも遠くへいつちまえばいいのに、とひそかに思っていました。

「いったい、どうなるんだ。」

と、みんなはいいあいました。

「おれたちがあいつとけんかをはじめるとする。あいつが切りかかる。すると、ひと打ちで七人やられてしまう。それじゃ、とてもかなわん。」

そこで、みんなはかくごをきめて、そろって王さまのまえにでて、おいとまごいをしました。

「わたくしどもは、ひと打ちで七人もうちたおすような男とは、とてもいっしょにはおられません。」

と、みんなはもうしました。

王さまは、たったひとりのために、忠義ちゆうぎな家来けらいをのこらずうしなってしまうのをおなしく思いました。そして、

（いっそのこと、こんな男が目にとまらなければよかったのだ。できることなら、ひまをやりたいたいものだ。）

と、考えました。

でも、王さまには、思いきつてひまをやるだけの勇氣ゆうぎもありませんでした。なぜって、もしそんなことをしようものなら、この男が家来けらいもろとも王さまをうち殺ころして、かわりに王さまの位くらゐにつきはしないかと、それが心配しんぱいでならなかつたのです。

王さまは、長いこと、ああでもない、こうでもないと考えぬいたすえ、ようやくうまいくふうを思いつきました。そこで、仕立屋さんのところへ使いをやつて、こういわせました。

「あなたが世にもすぐれた豪傑であるのを見こんで、ぜひたのみたいことがある。じつは、この国のある森のなかに、大男がふたり住んでいて、ものはぬすむし、人は殺すし、火はつけるし、とにかくひどい悪事ばかりはたらいているのだ。この男たちに近づくと、どんなものでも命があぶない。もしこのふたりの大男をやつつけて、殺してくれば、王さまのひとりむすめを妻にあげるし、国の半分を持参金としてあげよう。なお、馬にのつたさむらいを百人あなたにつけてやつて、すけだちさせる。」

(こいつは、おれのような男にとつて、やりがいのあるしごとだぞ。)
と、仕立屋さんは心に思いました。

(美しいお姫さまと国を半分か、そうざらにあるしごとじゃあないな。)

そこで、仕立屋さんはへんじをしました。

「いいですとも。大男どもは、かならずわたしがやつつけておめにかけます。百人のさむらいはいりません。ひと打ちで七つをやつつける男には、ふたりぐらい、ものの数ではあ

りません。」

ちびの仕立屋さんは、のこのこでかけていきました。百人のさむらいたちは、馬のつて、あとからついていきました。森のはずれまできますと、仕立屋さんはおともの人たちにいいました。

「いいから、ここで待つていてくれ。おれひとりで、かならず大男どもをかたづけしてみせるから。」

それから、仕立屋したてやさんは森のなかにとびこんで、右や左を見まわしました。しばらくたつたとき、ふたりの大男のすがたが目にとまりました。大男どもは、とある木の下にねころんで、ねむっています。ところが、そのものすごいびぎのために、木の枝えだが上下にゆれています。

それを見て、仕立屋したてやさんは、すばやく両方のポケットに石をいっぱいいつもこんで、その木によじのぼりました。木のなかほどもまでのぼりますと、するすると一本の大枝おおえだをつたって、ちょうどねむっている大男たちのま上のところまできて、そこにこしをおろしました。そして、かたいつぼうの大男の胸むねの上に、石をつぎつぎとおとしはじめました。

その大男は長いこと気がつきませんでした、それでもとうとう目をさまして、なかま

をつつついて、いいました。

「なんでおれをなぐるんだ。」

「おまえ、夢ゆめでも見たんだろう。おれはなぐりやあしねえもの。」
と、相手あいての男はこたえました。

それから、ふたりはまたぐうぐうねこんでしまいました。仕立屋さんは、こんどは、もういつぼうの大男をめがけて、石をひとつおとしました。

「なにをしやがる。」

と、その大男がどなりました。

「なんでおれに石をぶつつけるんだ。」

「おれはなんにもぶつつけやしねえよ。」

と、さいしよの大男がこたえて、なにかぶつぶついいました。

ふたりはちよつとのあいだ口げんかをしていましたが、つかれきっていましたので、まもなくかなおりをして、またまたねこんでしまいました。

そこで、仕立屋したてやさんはまたもやいたずらをはじめました。こんどは、いちばん大きい石をえらびだして、そいつをさいしよの大男の胸むねをめがけて、力いっぱいぶつつけました。

「なんてえひでえことをするんだ。」

大男はこうわめきざま、気がくるったようにとびおきて、なかまの大男をどんと木のほうへつきとばしました。そのとたん、木はぐらぐらつとゆれうごきました。

相手あいてもおなじようにしかえしをしました。それから、ふたりはいかりくるって、木をひっこぬいて、なぐりあいをはじめました。こうして、あばれまわったあげく、とうとう、ふたりともいちどきに地じべたにぶつたおれて、死しんでしまいました。

さてそこで、ちびの仕立屋さんしたてやは地べたにとびおりました。

「こいつらが、おれののつかつた木をひっこぬかなかつたのは、いやはや、もつけのさいわいというもんだ。」

と、仕立さんはいいました。

「さもなきや、リスみたいに、ほかの木へとびうつらなきやあならないとよ。もつとも、おれみたいなやつは、身みがかかるいからなあ。」

仕立屋さんしたてやは刀かたなをぬいて、ふたりの大男の胸むねに二度、三度、ずぶりずぶりとききさしました。それから、馬にのつたさむらいたちのところへでていって、いいました。

「しごとはすんだぞ。ふたりとも、おれが息いきの根ねをとめてきた。だが、ちよいとほねがお

れたぞ。やつらは、くるしまぎれに木をひっこぬいて、むかつてきたからな。だが、おれ
 みたいに、ひと打ちで七つもやつつけるものにむかっちゃ、齒もたたん。」

「それであなたは、おけがもなさらなかったんですか。」

と、さむらいたちはたずねました。

「うん、うまいぐあいにいったんだ。」

と、仕立屋さんはこたえました。

「あいつらに、おれの髪の毛一本おらせやしなかったさ。」

さむらいたちは、どうしてもそれを信じようとはしませんでした。そこで、みんなは森
 のなかに馬をのりいれました。すると、たしかに、仕立屋さんのいったとおり、大男ども
 が、じぶんたちのながした血のなかにひたっています。しかも、あたりには、ひっこぬか
 れた木がごろごろしているではありませんか。

ちびの仕立屋さんは、王さまから約束のごほうびをいただくこうとしました。ところが、
 王さまは、まえにした約束のことを後悔して、どうしたらこの豪傑を追いはらせるだ
 ろうかと、またまた考えていたところでした。

「おまえは、わしのむすめと国を半分ももらうまえに、もうひとつ、いさましい手なみを

見せてくれねばならぬ。」

と、王さまは仕立屋したてやさんにいいました。

「じつは、森のなかを（一）一いっかくじゆう角獣かくじゆうがかけまわっておって、ひどい害がいばかりしておる。まず、こいつを生けどりにしてもらいたい。」

「一いっかくじゆう角獣かくじゆうの一いっかくじゆうぴきぐらい、大男ふたりにくらべれば、なんでもありません。なにしろ、ひと打ちうちで七つというのが、わたしの手なみなんですからね。」

こういつて、仕立屋さんはなわを一本と、おのを一ちようもって、森にでかけていきました。そして、こんどもまた、おともの人たちには、そとで待まっているようにいいつけました。

長いことさがすまでもなく、まもなく、その一いっかくじゆう角獣かくじゆうがあらわれました。まるで、その角つので仕立屋さんをあつさりつきさしてくれようともいうように、仕立屋さんめがけて、まっしぐらにおどりかかってきました。

「しずかに、しずかに。」

と、仕立屋さんはいいました。

「そうあつさりとはいかんぞ。」

仕立屋さんはそこにじつと立って、待っていました。けものがすぐ近くまできたとたん、ひらりと身みをかわして、木のうしろへまわりこみました。

一 角獣いっかくじゆうは、力いっぱい木につつかかかっていったものですから、その角つのをぐさつと木の幹みきにつきさしてしまいました。そして、もういちどそれをひきぬく力もなく、そのまま生けどりにされてしまったのです。

「それ、小鳥ことりをつかまえたぞ。」

仕立屋したてやさんはこういって、木のうしろからでてきました。そして、まず一 角獣いっかくじゆうの首くびになわをかけ、それからおのでもって角つのを幹みきからひきはなしました。こうして、すっかりしまつがついたところで、そのけものをひっぱって、王さまのところへつれていきました。王さまは、こうなってもまだ約やくそく束たばのほうびをやるつもりはありません。いよいよ、三つめの注ちゆうもん文もんをだしました。仕立屋さんは、婚こんれい礼れいのまえに、森のなかでものすごくわるいことばかりしているイノシシをつかまえなければならぬ、もつとも、それには狩かりゆ人うどたちに手つだわせるが、というのでした。

「けっこうですとも。」

と、仕立屋さんはこたえました。

「そんなことは、子どもだましみたいなものですよ。」

仕立屋さんは、森のなかまで狩人たちをつれていきはしませんでした。もつとも、狩人たちしてみれば、そのほうが、ありがたかったわけです。なぜって、狩人たちはこのイノシシのためにはもうなんどもひどいめにあっていましたから、イノシシを追いかけるなんてことは、ごめんだったのです。

イノシシは仕立屋さんのすがたをひと目見るなり、口からあわをふき、きばをといで、仕立屋さんめがけてとびかかってきました。仕立屋さんを地べたにつきたおそうというのです。

けれどもそれよりはやく、このすばしっこい豪傑は、そばにあった礼拝堂にとびこんで、すぐまた上の窓からピョンとひととびでそとへとびだしました。

イノシシのほうは、仕立屋さんのあとを追って、なかにとびこみました。ところが、仕立屋さんはそとがわをピョンピョンとびまわって、イノシシのうしろから扉をピシヤンとしめてしまったのです。

なかでは、イノシシがさかんにあばれまわりましたが、からだがおもすぎうえに、無器用なものですから、窓からとびだすこともできず、とうとう生けどりにされてしまいま

した。

ちびの仕立屋したてやさんは狩かり人ゆうどたちをよびよせて、このえものをよく見せてやりました。それから、この豪傑ごうけつは王さまのところへもどつていきました。こうなつては、さすがの王さまも、まえにした約束やくそくを、いやでもおうでもまもらないわけにはいきません。そこで、仕立屋さんにじぶんのむすめと国の半分はんぶんをやりました。

もしも王さまが、じぶんのまえに立っている男は、豪傑ごうけつどころか、ただの仕立屋にすぎないことを知つたなら、きつと、もつとくやしがつたことでしょうよ。

そこで、婚こん礼れいはたいそうりつぱに、といつても、みんなからは、あまりよろこばれもせずに、とりおこなわれました。こうして、仕立屋したてやさんからひとりの王さまができたのです。

しばらくたつてから、わかいお妃きさきさまは、夜中よなかに夫おつとが夢ゆめを見て、こんなねごとをいつているのをききました。

「小僧こぞう、ジャケツをこしらえろ。それから、ズボンをつくろえ、やらないと、ものさしで横よこつつらをひつぱたくぞ。」

これをきいて、お妃きさきさまには、わかい王さまがどんな横よこ町ちやうの生まれのひとか、よく

わかりました。そこで、あくる朝、おとうさまにこのなやみを話して、

「あのひとは仕立屋したてやにちがいありません。どうかおとうさまの力で、あのひとからあたしをすくつてくださいませ。」

と、おねがいました。

王さまはお妃さまきぎぎをなぐさめて、いいました。

「今夜はおまえの寢室しんしつの扉とびらをあけておきなさい。わしは家来けらいたちをそとに立たせておく。あの男がねこんだら、ふみこんでいつて、しばつてしまい、船ふねにのせて、遠くへつれていかせよう。」

お妃さまは、これで満足まんぞくしました。ところが、王さまの刀かたな持ちがそばでこの話をのこらずきいていたのですが、この男はわかい王さまがすきでしたので、このたくらみをかかい王さまにすっかり知らせしてしまったのです。

「よし、そんならじやましてやれ。」
と、ちびの仕立屋したてやさんはいいました。

夜になりますと、仕立屋さんはいつもの時間に、お妃さまきぎぎといっしょにベッドにはいりました。

お妃さまは、仕立屋さんがぐっすりねこんだところを見はからって、そっとおきあがりました。そして、へやの扉をあけてきて、またもとのようにベッドに横になりました。

ちびの仕立屋さんは、ねむっているようなふりをしていただけだったのですから、ふいに、はつきりした声でどなりだしました。

「小僧、ジャケツをこしらえろ。それから、ズボンをつくろえ。やらないと、ものさしで横つつらをひっぱたくぞ。おれさまはな、ひと打ちで七つをやっつけ、大男をふたりも殺したんだ。そればかりか、一角獣をひっぱってきたこともあるし、イノシシを生けどつたこともあるんだ。そのおれさまが、なんでそとにいるやつらをこわがるものか。」

仕立屋さんがこういうのをききますと、みんなはすっかりこわくなって、まるで魔王の軍勢に追われてでもいるように、われさきにとにげだしました。そしてそれからは、もうだれひとり、仕立屋さんに手むかおうというものはありませんでした。

こうして、ちびの仕立屋さんは、一生のあいだ、ずうつと王さまでいました。

(1) 一角獣というのは、馬のかたちをした、ひたいに角が一本ある、伝説上の動物のこと。

青空文庫情報

底本：「グリム童話集(二)」偕成社文庫、偕成社

1980 (昭和55) 年6月1刷

2009 (平成21) 年6月49刷

※表題は底本では、「いさましい ちびの仕立屋《したてや》さん」となっています。

入力：sogo

校正：チエコ

2019年12月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

いさましい ちびの仕立屋さん

グリム Grimm

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 矢崎源九郎訳

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>